現場から不登校施策を考える

－フリースクール「ひたち未来アカデミア」の一年－

特定非営利活動法人　ひたち NPO センター・with you

令和５年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

はじめに

2022 年 9 月、私たちがフリースクール「ひたち未来アカデミア」を開設してから 1 年半がたちました。設立当初は小学校 1 年生から中学 3 年生までが本スクールに通い、現在では中学 2 年生、3 年生、高校 1 年生と学年が上がってきています。とはいえ、一人一人が直面している成長課題は異なり、私たちの支援のあり方も一人一人異ならざるを得ません。その成長課題を見つけるために試行錯誤を重ね、それぞれに応じた関わり方をしてきました。

本スクールは基本的にボランティアにより担われています。講師は教職経験者などに教科学習を担ってもらっていますが、それだけでなく、学生や市民にも様々な場面で重要な役割を果たしてもらっています。ほぼ月に一回、彼らは本スクールに通う児童生徒に即したユニークな企画をたて、実際にそれを行ってもらっています。たとえば、運動会、理科実験、工作、クリスマス会、e スポーツなどです。コミュニケーションが苦手な児童生徒もいますが、身体を動かすことによってまた優しい言葉かけによってその苦手意識と付き合おうとする児童生徒もいます。その積み重ねが苦手意識よりも面白さに転じ、他人が見えてきた児童生徒もいますし、その反対に苦手意識を持ち続け、疲れてしまう児童生徒もいます。

本スクールに通う児童・生徒はそれぞれ学校に通わない事情は異なっています。講師、職員は一体となってその事情が子どもたちの成長にどのような影響があったのか、これを承けて子どもたちはどうしたいのかなどを探りながら、最適な支援を模索してきました。

この冊子では教科学習、総合学習などの私たちの実践をお伝えするとともに、その中で見えてきた本スクールと大人社会の課題を明らかにしました。これはシンポジウム「県北地域におけるフリースクールを考える」（2023 年 11 月 11 日実施）とフォーラム「現場から不登校施策を考える」（2024 年 3 月 16 日実施）における議論から作成したものです。後者では前者の議論や語りに基づいて課題を抽出し、その課題を皆様と議論し、具体的な施策に落とし込みました。

この冊子についてもまた様々にご批判いただきたいと思っています。最後に、本スクールの不登校の親子支援がさらに充実することを祈りながら、本スクールにご理解いただき、関わってくださったボランティア講師、総合学習を担ってくれた学生、市民、本スクールを理解していただき、協力していただいた茨城県、日立市の両教育委員会、不登校児童生徒が在籍する学校の校長先生、教員の皆様に心から感謝したいと思います。

ひたち NPO センター・with you 代表理事
安　田　尚　道

現場から考える不登校支援

―市民と「チーム学校」の協働による学習権の保障－

私たちは、11 月 11 日にシンポジウムを実施し、3 月 16 日にフォーラムを開催し、シンポジウムで話し合われたことに基づいて不登校施策について議論を致しました。そこでは、市民と協働する「チーム学校」を構築し、すべての子どもたちに学習権を保障するための施策が求められると整理しました。これは日立市において教育基本法や SDGs4-1、教育機会確保法、COCOLO プランなどの趣旨を実現することに他ならないと考えます。

1. **フリースクールの活動環境を整備すること**
   子どもたちに多様な学ぶ機会を用意し、学習権を保障するために（憲法 26 条 1、教育機会確保法 13 条)、行政は、運営費の支援など市民の力による多様なフリースクールが活動できる環境を整備すること。
2. **フリースクールにおける授業料を無償化すること**
   フリースクールは義務教育期間において「学校に行かない」ことを選択せざるを得ない子どもたちのための義務教育のもう一つの学ぶ場です。「義務教育は、これを無償とする」（憲法 26 条 2）ことから、授業料などフリースクールに通う児童・生徒にかかる費用を無償とすること。
3. **すべての子どもたちにとって魅力的な学校にするための「チーム学校」を創ること**
   すべての児童・生徒が安心して学習するために、学校長はクラス担任や学年担当教員、養護教員、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、特別支援教育支援員などが親や子どもの相談、支援、指導を単独で行うだけでなく、保護者の合意に基づいて相談時に入手した児童・生徒の気持ち、学習状況、生活状況などについての情報を共有し（教育機会保法 9 条、COCOLO プラン、学校教育法施行規則 65 条)、児童・生徒が安心して学校生活を送れるように（教育機会確保法第 3 条 1)、チームとして支援、指導できる学校経営を行うこと（学校教育法 37 条 4)。
4. **学校とフリースクールの指導・支援方針を共有すること**
   教育機会確保法における関係諸機関や学校、フリースクールが連携して相談体制をつくる趣旨（教育機会確保法第 20 条）に則って、親、学校およびフリースクールの合意に基づいてフリースクールに通う児童・生徒一人一人についてそれぞれの指導支援方針を年数回すりあわせる機会を設定すること（COCOLO プラン)。
5. **不登校児童・生徒や親との信頼関係を形成し支援するための OJT による研修**
   学校生活上の困難を有する児童・生徒や不登校児童・生徒を支援、指導する教職員に対して研修を実施する際（教育機会確保法 18 条)、教職員と当該児童・生徒、親との信頼関係を作り、彼らの状況を適切に把握し、働きかけることが重要です（教育機会確保法第 8 条)。そのために、研修では座学だけでなく、適当な期間における専門家や教育経験者による OJT を実施すること。

シンポジウム

県北におけるフリースクールを考える

2023 年 11 月 11 日実施

「ひたち未来アカデミア」の１年を振り返って

ひたち NPO センター・with you

代表理事　安田尚道

不登校の急増と原因の難しさ

「ひたち NPO センター・with you」は市民活動、NPO を生み、育て、支える中間支援団体として 2002 年に設立されました。私たちの活動スタイルは、私たち自らが地域の問題を発見し、解決するなかで市民活動を生み、育て、支えるというものです。私たちは創設以後、多様な活動を行ってきました。今日お話しするのは、生活困窮家庭の子どもたちの学習支援とフリースクールのことです。

まず、不登校者の現状を確認しておきましょう。文部科学省の調査によると、2020（令和 2）年度の全国の不登校者数は 196,127 人であり、1000 人あたり 20.5 人でした。令和 4 年度は同省の調査では、全国では 29 万 9 千人ほどで、茨城県では不登校児童・生徒数は 8,577 人であり、過去最高となりました。これを 1000 人あたりでみると、本県は全国平均 31.7 人を上回る 39.7 人であり、全国で最も多い状況でした。小学校では 23.4 人であり、全国平均 17.0 人のなかで全国 2 位となり、中学校では 69.6 人、全国平均 59.8 人のなかで全国 5 位という状況です。文科相の全国調査などによりますと、「無気力・不安」が原因の半数以上を占めていますが、なぜそのような状態になったのか理由は明らかではありませんでした。不登校の原因はなかなかつかむことができないのが現状のようです。

学習支援の三本柱－生活困窮家庭の子どもたちのためにー

本法人は、2014（平成 26）年から生活困窮世帯の子どもたちを対象とした無料の学習支援を行ってきました。そこには不登校の子どもたちが一定数通っておりました。そこで、不登校児童・生徒の学習権を保障する必要性を強く実感し、フリースクールを開設することになりました。

現在では、日立市で 6 教室、土浦市、つくば市でそれぞれ 1 教室ずつ、合計 8 教室を運営しています。隔月で講師会を開き、そこで、教育政策や子どもたちの現状について学習したり、各教室の情報交流や難しいケースの検討をしたりしています。このなかで、講師の皆様と一緒に「子どもの学習権の保障」というミッションと「個別指導による学習を通じた居場所作り」というビジョンを作り上げてきました。また、学習支援の三つの柱として、無料の塾の他、親支援、親子支援を掲げ、実施してきました。親支援は、親は最大の子どもの環境と考え、親を支援することが子ども支援につながるとし、進路進学や自分の働き方の悩みなどに臨床心理士や教育専門家による相談を行うことです。親子支援は子どもあるいは親子そろって楽しむ企画を常磐大学のボランティアグループによって作成してもらい、これを彼らの主催の下で実施してもらっています。現在、8 教室で 50 名ほどのボランティア講師が 130 名ほどの子どもたちを支援しています。10 年間にわたる支援活動のなかでいわゆる発達障害と言われる子どもたちや不登校児童・生徒が一定数通うようになってきました。また、子どもたちの基礎学力の低下も実感するようになってきました。このなかで不登校児童・生徒が私たちの塾で学び、学校に復帰する事例も見られるようになり、この子たちの学習権を保障することが彼らの社会的

自立にも必要であると認識するようになりました。

ひたち未来アカデミアのミッションとビジョン

日立市においては 2023（令和 5）年において 400 名前後の不登校児童・生徒がいましたが、民間のフリースクールがなく、彼らのうち 10 名前後がチャレンジクラブといういわゆる「適応指導教室（現・教育支援センター）」に通っているに過ぎませんでした。そこで、2022 年の理事会で 2023 年にフリースクールを開設することを目指して、準備会を設置することにしました。準備会は隔月で開催されました。準備会には、水戸や県北の三大学（常磐大学、茨城大学、茨城キリスト教大学）の学生、教職員有志、IT 企業、関心のある市民や市議の方々にお集まりいただきました。

ここにおいて、「子どもたちの学ぶ意欲に応え、自分らしく成長し、社会の担い手となる子どもたち」というミッションを共有し、「学習を通じた居場所の中で共に生きることを学ぶ教室」、「静寂と活動、内省と対話、学習と遊びからなる子どもが主人公の教室」、「子どもたちが伝え合い、助け合い、学び合い、成長し合う教室」というビジョンを作りました。このミッションとビジョンを象徴するフリースクールの名称を皆で考え、「ひたち未来アカデミア」が決定されました。

このミッションとビジョンの下、入校までの流れを考えました。入校前には、親と子どもに対する本スクールの説明、臨床心理士による子どもの心の状況の評価、講師の口頭による学力の評価と学力レベルにあったカリキュラムの作成をほぼ二日に亘って行い、この間に本スクールを体験してもらって、その後入校の手続きに入ります。

子どもたちの心と学力の状態に応じた学習支援

入校後、このミッションとビジョンの下に、以下のような一日が開始されます。「学習を通じた居場所作り」や「子どもが主人公」に応じて午前は子どもの心と学力の状態に応じた個別指導を実施し、何を学習するかは子どもと一緒に考えています。始業は 9 時からですが、9 時に来る児童生徒もいれば、10 時に来る児童生徒もいます。また、学習時間も 3 時間の児童生徒もいれば、1 時間や 30 分の児童生徒もいます 12 時から 13 時までの昼食を挟み、13 時から 15 時までの午後の時間は「静寂と活動、内省と対話、学習と遊び」というビジョンに基づいて子どもたちの自由設計による時間としました。散歩をしたり、港が近いので釣りをしたり、居眠りをしたり、ボーとしたり、なかには学習をする児童生徒もいます。そして月に一度のペースで、「学習と遊び」の下、市民や学生による総合学習が行われています。これらの活動を通じて、子どもたちの学習権を保障し、社会の担い手となるように、「伝え合い、助け合い、学び合い、成長し合う教室」を作ることを目指しています。開校は 9 時から１５時まで、週三日開校としています。児童生徒は自分の事情に合わせて通学しています。

実施体制と現状

現在、開設して 1 年と 3 ヶ月が経ちましたが、今までに問い合わせや説明の申し込み

が 45 件を超え、これらが途絶えない状態です。そのうちの半数が説明のための面接に訪れました。しかし、実際に本校への通所を登録した児童・生徒は 2022 年度で小学校 1 年生から中学 3 年生までの 11 人でした。3 月時点で、一人は学校に復帰し、辞退が一人、他県への転校者が一人であり、一人が中学 3 年生でフリースクールを終了することになり、4 人が来年度も引き続き本スクールに通うことになりました。また、その他に、総合学習のときだけ参加する児童が一人いました。また、講師は全員がボランティアであり、4 人の市民が講師として活動し、スタッフ 2 名が全体のコーディネートを行う体制ができあがりました。

フリースクールの課題

私たちがフリースクールを開設しようとした契機の一つに生活困窮家庭の子弟の支援のための無料の塾に不登校児童・生徒が通い始めたということでした。彼らは、生活困窮家庭で育ちながら、不登校という不利な条件を抱えていました。彼らは学習が保障されず、基礎学力の形成の点でも不安を抱えています。しかも、教育機会確保法によりフリースクールがある意味法認されたにもかかわらず、日立市や本県県北地域には教育支援センターが二教室あるだけで、民間のフリースクールがありません。400 人を超える不登校児童生徒に対してあまりにも少なすぎます。地域に彼らの受け皿を早急に設置する必要があります。

しかし、たとえあったとしても、民間のフリースクールには運営費がかかるため、どうしても授業料を取る必要があるため、生活困窮世帯には民間フリースクールという選択肢はありません。そこで、本スクールでは、生活困窮世帯の不登校児童生徒には授業料を無料化する工夫をしています。ちなみに、本スクールの月謝は 22，000 円であり、全国的には 3 万円ぐらいと言われています。

さらに、学校に通うエネルギーを枯渇させられた児童生徒も少なからずいます。彼らはフリースクールに通うエネルギーもないのが現状です。その児童生徒のためにもアウトリーチが必要ですが、その難しさも実感してきました。本スクールはこれらの課題に応えていくために皆様と一緒にさらに試行錯誤していきたいと考えています。

活動報告その 1

－市民代表者－

市民代表と言うよりは関わった市民の一人として報告させてもらい、詳細な自分の気持ちを述べていきたいと思います。これによってフリースクールの実態がわかると思います。率直に言えば、一年間、気をもんだし、大変な思いをしてきました。

通学するという前提からの出発

まず、子ども、11 名の登録があったとのことですが、全員そろうことはありません。フリースクールに実際に通ってくるのは 1 名、2 名、3 名、4 名であり、私が訪問したときは、一人も来ないこともありました。学校は子どもが来ることを前提に成り立っていますが、フリースクールはその前提がありません。私も精神的にも厳しいものがありました。うどん作りを一回やりましたが、本来なら、月に一回やりたいのですが、子どもが来ないことにはそれができない。ここがつらい。学校は楽だ。黙っても来るのだから。フリースクールはその前提から出発するのが現実です。親も子もつらい思いをしている。これが大きな課題だと思います。

相談者も多いが、登録につながらない理由

先ほど説明がありましたが、相談に訪れても、登録していない 30 数名の方はどうなっているのか。その一つはお金の問題です。フリースクールには財政的に支援をしていかなければならないと思っています。不登校者がお金の問題で来られないのは残念です。学校に通えている子は行政の費用で賄っているのに、不登校への行政からの援助はほとんどありません。不登校は子どもの勝手であるとはいえない。手厚い支援はますます重要です。ひたち未来アカデミアの建屋は、昭和 25 年に建てられた、自分の実家です。建屋をどこにしようかというと議論が長引くと立ち上げられなくなると思って、実家を提供しました。フリースクールにはお金がないので、格安の家賃で貸しています。さらに二つ三つのフリースクールが立ち上がれば、市の対応も違うのではないかと思いますが、そうでなければ対応できないのは残念です。継続は力なのだから、今年、来年と苦しいながら続けてもらえれば、光が見えるのではないかと思います。今はまだ子どもたちの状況が不安定ですが、市民が活躍するようになればと思っています。

活動報告その 2

－総合学習を担う学生代表－

「できることを、できるときに、できるだけ」をテーマに、社会のためにできることは何かを主体的に考え活動を行っています。私たちの団体のロゴマークは情熱の赤、創造力の白、献身の青の三色からできています。ここでの私たちの活動は、子ども支援活動、震災復興支援活動、地域支援活動などであり、これを通じて社会的課題解決への貢献をしています。子ども支援活動の一つとしてひたち未来アカデミアイアでの活動に取り組んでいます。

学びのうえのボランティア

私たちはボランティアスタッフの様々な能力を活用し、幅広い学びの機会を提供するように活動しています。私たちの団体は「学びのうえのボランティア」を掲げており、様々な活動を行う際に勉強会を開催しています。ひたち未来アカデミアでの活動を行うにあたり、子どもたちの個性や抱えている問題を理解することを目的として安田代表をお招きして勉強会を開催しました。このことにより子どもたちの抱えている問題を学習し、子どもや保護者のためにできることは何かを考えることができました。関係作りでは生徒たちの関係性を構築したりして総合学習を準備しました。関係作りではたとえば活動をする前に、12 月、1 月にひたち未来アカデミアを訪問し、ボードゲームなどを行いました。今までにオリジナルエコバック作り、ホワイトボード作り、e スポーツ体験、運動会、ハロウインパーティを行いました。

身体を動かし、子ども同士で考える

オリジナルエコバック作りでは初めて総合学習を実施したため不安がありましたが、無事開催することができました。子どもたちは学生と一緒に個性あふれるエコバックを制作しました。ホワイトボード作りでは、カッターで段ボールを切ることに苦戦している子どももいましたが、子どもたち同士でこうしたらうまくできると、声をかけたり、どのように装飾するかを話し合い、楽しい雰囲気で作業を進めることができました。e スポーツ体験ではいくつかのゲームを行いましたが、「桃太郎伝説」では各都道府県の観光名所や特産品を学ぶことができました。運動会では、午前の部では海岸にてフラッグ取りと水鉄砲の的当てを行いました。午後の部は体育館にて目隠しをし相手を探すゲームをしたり、借り物競走を行いました。普段はあまり体を動かさない子どももいましたが、一生懸命走って楽しかったなどの声があり、当日は学生と運動を楽しむ様子が見られました。ハロウインパーティでは、クイズを交えてハロウインに対する歴史や文化などを学び、デコレーションのお菓子を作りました。最後に、ミイラゲームを行いました。

子どもを理解し、学びを取り入れた体験学習

これらの活動を通して主体性、協調性、コミュニケーション力など、子どもがもつ

様々な可能性を学ぶことができたと考えます。子どもたちの成長する姿や保護者の方が安心してくださる様子が見られ、子どもが楽しく学べる環境があることの重要性を感じています。一方では、子どもたちの特性を理解し、それぞれの成長に貢献できる企画を作ることの難しさを実感しました。いかに遊びや体験のなかに学びを取り入れた総合学習を企画していくかが私たちの課題だと考えます。今後もメンバー一同、学びを大切にし、アイデアを出し合って、子どもの個性を尊重した幅広い学びの機会を提供できるように総合学習を計画していきたいと考えています。

活動報告その３

－親の会代表－

「学校に行かない選択」に至るまで

二人の子どもが不登校の親です。何も困ることなく生活してきた普通の家庭でした。学校に行くのが当たり前であり、働くことも、親の言うことも当たり前、自分の子どもにもこのことを当てはめましたが、子どもにとってはそれが押しつけだったり、気持ちをくんでもらえなかったりということで、そういう意思表示がありました。子どもはそのなかで学校に行くことにエネルギーが使えなくなってきました。二年前に娘が登校しぶりという形でこのことを教えてくれました。しかし、当時、日立市には一切情報がありませんでした。教育相談の場所にも相談しに行きましたが、学校と連携がとれていれば大丈夫ですとの返答があって、その言うとおりに学校と連携をとっていました。娘のことをないがしろにして、学校と連携をとっていたのです。そのなかでますます娘が学校に行くエネルギーがなくなっていった事を目の当たりにして、これはどういうことか。私は何をすれば良いのかと、情報を求めたとき、その情報は日立市になく、栃木まで行ったり、太田に行ったり、ひたちなかに行ったり、情報を求めるための「親の会」を探して動き回りました。そのときに、学校に行かない選択もあると言うことがわかりました。娘に学校にいかなくていいよと話をしたら、後に、娘からこういう選択をくれてありがとうといわれました。

当事者の立場に立って相談できる場所を

日立市に情報がない、頼る場所がない、不登校は悪いことではないが、学校に行くことが当たり前と過ごしてしまったなかで、問題にされているのではないかという風に考える親御さんって私を含めてたくさんいるのだと思います。そういう人たちにお子さんの選択は間違っていないよと、もちろん休めさせたお母さんたちも、もうそのままでいいのだよと伝えてあげられる場所がないかなと、私が悩み、パニックになっていたところ、かつて関わりのあったひたち未来アカデミアに相談して、親の会の活動を保護者の一員として一緒に活動をすることになりました。つながりが持ててなかったと悩まれるお母さんやこういう風に出てこれないと悩む親御さんもいて、そんなに悩むことではないと一般の人は言うかもしれませんが、やはり悩ましいことだけど、家の中でお母さんが元気になると子どもたちも元気になるという事を体感しているので、小さいけれどもその先にフリースクールが満杯になるという未来を想像して、いつでもここにいれば話を聞くよ、あなたはそれでいいんだよと私が言ってもらえたように、伝える場所になりたいなとの思いで親の会の活動をしています。2 年前に娘が死にたいと私に言ってきたことが、そういう家庭がこの先絶対にあってはいけないという思いを皆で少しずつ広めていけたらと思っています。

活動報告その 3

－ボランティア講師代表－

私は子どもの指導に関わる講師の立場から 3 点話したい。一つ目は、私がここに関わるようになった経緯について。二つ目は、講師として子どもたちと実際に関わって学習を進める上で配慮していること。三つ目は、講師間の連携について。話を進めていきたいと思っています。

多様な子どもたちに多様な学びの場を

まず、こちらに関わった経緯ですが、30 年以上教員をしてきましたが、教員生活の後半は特別な支援や配慮を要するお子さん、その中にも不登校のお子さんはいましたが、そういうお子さんの指導を行ってきました。特別な支援が必要なお子さんに関わり始めたのは、20 年ほど前になりますが、すでに市内の小中学校で少しずつ不登校や学校に来ても教室には入れない子、学校に来ても保健室や図書館に登校している子、放課後登校などのお子さんに関わってきている中でそういうお子さんたちの学校や教室に戻すことの難しさを実感していました。特に、不登校が長期化し、学年が上がるにつれて、学校や教室に戻るハードルが高くなる、できるだけ早い段階での適切な対応が必要であると感じていました。不登校の原因がたくさんあって、複雑に絡まっていて、突発的ではなく、長年の間に積もりつもってきた息苦しさや生きづらさがわかってくると、これからますます不登校の生徒が増えるだろうとの予感がありました。2020 年の文科省のデータによると、不登校の原因のトップは小中高を通して不安と無気力が大きな割合を示していました。不安を解消しないと、学校に行こうとか、勉強しようとかという気力もわいていかない。学校が怖いとか、教室にいるのがつらいとか、友達に見られるのがいやだとか、そういう不安の声をたくさん聞いてきました。そのような不安が大きい子どもたちには登校刺激をして無理に学校に戻そうとするよりも、安心できる場所で支援していく方がより現実的ではないかと感じるようになってきました。

子どもの学びを尊重したら、学ぶ場は学校以外に合っても良いのではないか、一言で不登校と言っても、多様な実態の子どもたちがいるので、多様な学びの場があっても良いのではないかと考えるようになってきました。私は数年前に退職しましたが、引きこもりの方とそのご家族の方を支援する機会があり、今社会問題となっている 8050 問題とか、9060 問題とか、そういうものについても学ぶ機会があり、不登校の子どもたちがそのまま引きこもりへ移行していくケースが多いことを知りました。どうにか学校に行けない子どもたちを早い時点で.自立とか社会参加に向けた支援につなげられないか、子ども一人一人にあった学びのお手伝いができないかと思っていました。

日立市ではじめでフリースクールが開設されることをメディアで知り、すぐにお話を聞きに行き、未来アカデミアのモットーや理念を聞いて共感して迷わず講師として参加することにしました。

子ども立場に立った基礎学力の回復

子ども指導で大事にしていることは子どもファースト、子どもに合ったオーダーメイ

ド的な指導です。現在、中学生や高校生が在籍していますが、長期の不登校で学習内容がすっぽり抜けてしまっているとか、学力が低下してしまったとか、体力が落ちて疲れやすい、体調を崩しやすい、不安定になりやすい。それぞれの実態に困り感がありますので、その子にあったペース、学習の仕方、休憩の取り方、そういうことに配慮しています。指導に当たる講師はほぼマンツーマンで指導することができていますので、苦手な学習内容でもできたと、わかったという実感が持てるまで時間をかけて指導することができていると思います。休憩とか、昼食を取りながら、午後の時間に、いろいろな話をするのも、大事な時間だと思っています。趣味とか、推し活の話とか、ペットの話とか、好きな食べ物や、やってみたいこととかいろいろで、孫に近い年齢で、子どもたちにとってはじじ、ばば相手に楽しく会話をしてくれています。この子たちは自己肯定感が低く、人に否定されたとか、批判されるとかと言うことに過敏なところがあります。頭から否定しないで、耳を傾け、話をできるようにすること、素の自分を出してくるようになると、励まし希望を持たせようとして話したことが、ある子どもにとっては励みになったりするが、別のお子さんにとってはそれがプレッシャーやストレスになって、つらい思いをしてしまうこともあります。本当に一人一人に対応することがこんなに難しいことだと日々試行錯誤しながら、内省しながら、指導しています。

講師同士のつながり

最後に、スタッフと講師が７名ほどいますが、常時、全員で顔を合わすことができないので、お子さんの一人一人について情報共有をしたり、よりよい指導や支援をするための協議をしたりするための講師会を定期的に開いています。また、連絡ノートを活用して学習の進み具合などを共通理解して、どの講師が指導担当しても、スムーズに学習が進められるように努めています。さらに、緊急性のある者についてはグループラインで連絡取り合って速やかに情報共有できるような仕組みも作っています。

シンポジウムの要点

① 教育機会確保法でフリースクールが「学校以外の場における学習活動」として認め

られていますが、日立市や県北においては不登校児童・生徒数が増大しているにもかかわらず、その受け入れ先があまりにも少なすぎます。たとえば、現在、日立市においては 400 名近くの不登校児童・生徒がいますが、その受け入れ先が教育委員会によるチャレンジクラブの二つの教室と私たちの「ひたち未来アカデミア」しかなく、これらを合わせても不登校児童・生徒の 5%前後しか対応できていません。

② 「ひたち未来アカデミア」への問い合わせは不登校児童・生徒の 1 割相当、45 名に上りますが、「アカデミア」に登録し、この一年半の間に通所したのはその 4 分の 1 の 11 名ほどでした。その理由は義務教育にもかかわらず授業料がかかることとアカデミアで学ぶことに関する子どもと親の合意がとれていないことでした。

③ 学校は、不登校という捉え方ではなく、別の学びの選択を抱えている子どもと捉えるならば、多様な環境を子どもたちに与えることが可能です。多様な環境と共に、一人一人の子どもたちの学習状況に合わせてゆっくり、ていねいに指導する必要もありますが、そのためには個別指導ができる教員の勤務状況も求められます。

④ クラス担任の先生などから不登校児童・生徒の自宅への出欠に関する問い合わせが毎日のようにあり、これがつらく感じることもありました。確かに日立市においても教育相談の機関や機会はありますが、子どもと親の立場に立って安心して相談できるというものでもありませんでした。学校に通うエネルギーをなくしている子どもにとって「学校に行かない選択肢」もありえます。子どもの居場所だけでなく、学校と子どもの間に立ち、悩む親の不安をもちよることのできる居場所も必要です。

⑤ 長期に亘る不登校により不登校児童・生徒の多くは基礎学力と体力が形成されていません。「ひたち未来アカデミア」では教科学習を担う講師は子どもの気持ち、考え方、不登校に至った事情、子どもの気持ちを理解しながら、学習の習得状況や体力に関する講師間の情報共有と内省の下、一人一人にあった個別指導を行っています。総合学習 [1] を担う学生も不登校児童・生徒の一般的な学習や「アカデミア」での留意点を学習し、子どもの気持ちに寄り添いながら学びを取り入れた遊びを行っています。

⑥ 学校、フリースクール、保護者が情報共有しながら、子の立場に立ち親子を支援する仕組みが求められます。

フォーラム

現場から不登校施策を考える

2024 年 3 月 16 日実施

基調講演

孤立から孤独へ、さらに共同体感覚の獲得へ

大洗町教育センター・副教育センター長
水口　進先生（臨床心理士、公認心理師）

絵から心を読む

3，4 年前から心理臨床センターにて不校生との話を聞くことが多くなりました。そのときの、お母さんの語る力が大切です。母が自分の世界を持つようになって、「カイロス」の時間をもてるようになったということです。ある母親は子どもと我を忘れて遊ぶこと大事であると話していました。長い時間関わって、子ども自身が徐々に変わっていくことが臨床心理士の醍醐味でもあります。

ところで、アカデミアにおいて最初のカウンセルをするときに、絵を描いてもらいます。この絵を見ながら、絵の空間の左は過去を表わし、過去に暗い悲惨な体験をしたのではないか。木に時計みたいなものを書いているが、これは心の傷かもしれない。幹の下に行けば行くほど、早期の心の傷を負っているのではないかということがわかってきます。そのときに、右側が青いよね。右側は未来を表わしているから、変わってくるかもねと言ったりします。

家は上から見たように描かれている絵がありますが、積極的に新しい環境になれない子は上から描く傾向があります。また、子どもにも聞こえているが、お母さんに向かってしゃべることもあります。木の根っこがすごいよね。私が不安定なんだけど、安定を求めて頑張っているんだよねとお母さんに言いますが、本人は聞いているので、俺は不安定だけど、頑張っているのだと思うかもしれない。ストロークが短い子は攻撃性、衝動性があり、イライラしている。右側はあいているので、未来は空白だよね。これからどんなことを描くか楽しみにしていれば良いと話したりします。

話をしながら、健常感がどれくらいあるのかを見ます。健康なところをどれだけ持っているかを見るわけです。場合によっては病院を紹介することもあります。攻撃的な子の絵は枝がとんがっている。お母さんに対して暴力を振るうこともある。ひたち未来アカデミアでも絵を描いて、こういう子だよと言うことを先生方にお知らせしています。どう変化しているかを見る必要がありますが、今のところ、そこに関わる時間がないのが現状ですが。

情動調律、自己愛

子どもと話をしながら、どんな学校生活をしているのか、どんな親子関係なのか想像していますが、その際自分の頭の中にあるのは情動調律というものです。小さいときから声かけをしている。親から赤ちゃんの心にチューナーを合わせる形でお母さんが声かけをしている。赤ちゃんが泣けば、母親は声かけをする。情動調律をされながら、我々は生活をし、大人になっていきます。そのなかでうまくチューナーあわせをされず

に、親や先生、友達のなかでチューナーあわせができないと、生活がうまくいかなくなります。下手な先生は情動調律が下手であり、子どもの心をつかめない先生もいます。情動調律をしながら、チューナーあわせをしながら、フリースクールでも子どもと話していってほしいと思っています。

子どもと話しているとき、自己愛についても考えています。うまくいっている子は自己愛を満たされています。親で満たされていても、学校で満たされないこともあります。自己愛を満たしている対象が自己対象であり、最初は親であり、学校に行くと先生です。子どもの自己対象になっていない先生、私に振り向いてくれない先生は子どもも面白くありません。自己愛を傷つけられると、子どもは怒りをもち、不登校になる可能性があります。自己愛には三つあります。鏡自己対象、理想化自己対象、双子自己対象ですが、思春期以降、先生が子どもの自己対象になること大事であると考えます。先生にはスーパービジョンがいない。専門の先輩の指導を受ける機会が先生にはないのですが、助言から指導を振り返る機会が必要ではないかと考えています。

たこあげ理論と抱えること

子育てのたこあげ理論というのがあります。小さいときにはお母さんに抱っこされ、だんだん家族に見守られながら、たこがあがる集団の風が必要だというものです。途中で落ちた場合、一回抱きかかえて、揚げることが必要。学校で抱きかかえて、一気に揚がっていく。そのとき、学校という集団で揚がらなければ、フリースクールなどで学びの風が吹いていれば、揚がっていく。それが高校か、中学か、大学かはわかりませんが。

なかなか風に乗らない子どものうちいじめを経験している子もいます。いじめはフラッシュバックし、報道を契機に思い出したりします。小学校に行ったとき、元気のなさそうな、健常感がないお母さんがいました。そのお母さんは小さい頃からいじめを受けていました。未だにフラッシュバックし、その後鬱っぽくなります。学校に行けたらOK ではなく、いじめは終わってから本当の心理療法が始まると言われるように、不登校の子は学校に行けるようになって終わるのではなく、その後もカウンセリング、自分のことを語ることは大事であると思います。不登校だった子が大学に入学してきますが、卒業してからまたというのがあります。そのときに孤立は危険だが、孤独は大事だというような話をします。会社でうまくいかないなどの人を見ると、共同体感覚が育ってないなと思うことがあります。

ところで、抱えることには、実際に抱える、目で抱える、声で抱える、表情で抱えるなどありますが、抱えは大事であることを先生に話すこともあります。このことについて意識が薄い先生もいらっしゃいます。抱えられていない子は思春期以後、自分の気持ちを抱えられなくなります。中学で抱えられていない感じでうろうろする子もいます。親が抱えていなければ、先生が抱えることも大事であると考えます。

OK 牧場の考え方と自己効用感―「I‘m OK、You are Ok」

横軸は「私は OK」、「私は OK でない」、縦軸は「あなたは OK」、「あなたは OK ではない」。この四つの現象のなかでその子はどこのあたりを歩いているのかを考えてみましょう。たとえば、自分も OK,周りも OK だと、一緒に何かをすることができる状態にある。自分はだめだけど、あなたは OK だと、逃げたくなる。そうやって学校に行けない子もいるわけです。

私は OK、あなたも OK が大事で、私は OK だけではだめだと考えます。私は OK で、あなたは OK ではないならば、「やっつける」ことになってしまう。自己肯定感、根拠のない妄想ではなく、あなたは大丈夫だというより、自己効用感の方が大事であると考えています。集団の中でやりがいがある。この仕事俺できるという効用感が重要であると思います。できる、できないは関係なく、自己を肯定するだけではだめだと思います。I'm OK だけでは人生の勝者とはいえないのではないでしょうか。

良いストロークと心の墨汁理論

子どもと話していると、「こんにちは」というと、明るく返してくる子がいますが、この子には金色のスタンプがたまっているのかなと思うし、学校や親とよいストローク（関わり）がたくさん受けているなと感じます。おはようと声をかけても、そっぽをむいたりすると、灰色のスタンプが一杯たまっているなと感じます。そうすれば、良いストロークがかけられていないと考えられます。皆で良いストロークをかけたら、金色になるかというと、そうでもない。その一方で、金色が一杯貯まっている子はしかっても自分悪いのだとは受け取らない。良いストロークを与えること大事であると思います。

子どもを大きな水槽に例えて、悪いストロークを墨汁とすると、大きな水槽に一滴たらしても、すぐに見えなくなる。水槽の水はすぐには黒くならない。物理学的にいえば、いったんは暗在系に行ったと考えて、毎日墨汁を一滴たらしていくと、そのうち一気に水槽は黒く濁る。今まで暗在系にあった墨汁が明在系にいってしまう。これが思春期かもしれないが、これを透明にするのは難しい。その後の高校、大学での対人関係のなかで墨汁は薄まるかもしれない。ある経験をする中で心の墨汁が薄まってくる事例はあります。

また、「ダメダメ催眠」をかけないでほしい。私たちの言葉は催眠であり、暗示です。私たちも暗示をかけられて育ってきました。ですから、いい暗示をかけられていない子もいます。良い暗示をかけられると、のびのび育つ。暗示は大事であり、ダメダメ催眠をかけずに、良い催眠をかけられているかを子どもと話しているときに考えています。そのとき、親や学校の話を先生、友達にどんな催眠をかけられてきたのだろうかと考えながら、話を聞いています

ネガティブ・ケイパビリティ

ところで、カウンセリングはネガティブ・ケイパビリティが大事です。これは解決のないところでもがく能力のことです。心の相談は答えのない相談です。答えがあると思って、子どもにああしなさい、こうしなさいというと、子どもが大変です。親は出口の

ないところでもがいています。カウンセラーはその親の伴走者となって付き合っていきますが、たまたま3年、4年とかかってうまくいくかもしれないし、1回、2回の面談でうまくいくかもしれない。しかし、うまくいったから良いというわけではありません。また、何年かしたら、同じ事が起こるかもしれない。こういうことがあれば、こういう人たちに相談すれば良い。こういうことをわかることが大事である。すぐ出口が見つかるとか、うまくいったからそれで良いのだと思わないほうがよいと思います。

「われの世界とわれわれの世界」そして共同体感覚

「われの世界とわれわれの世界」は、兵庫教育大学の学長であった梶谷先生の心理臨床学会の講演タイトルでしたが、内容は今の教育は「我々の世界」をどう生きるかを教えますが、「我れ」の世界をどう生きるかはを教えていないというものでした。これを聞いて、我の世界もちゃんとある。外の世界にもちゃんと適応する。学校楽しいな、仕事も楽しいなも適応かもしれない。しかし、学校楽しくないけど、自分の世界がある。これは孤独であり、孤独も適応なのです。孤独はだめだ、みんなと仲良く、仲良くというなら、過剰適応する。過剰適応すると、疲れる。疲れて落ちてきたのが孤立である。何もない世界であり、これが一番危ないのです。

豊かな実の世界を生きている人は豊かな虚の世界を生きています。虚はむなしいのではなく、自分の豊かな世界が大事であり、これが孤独の世界です。情報学が専門の京都大学の西田豊明先生は、虚数は想像上の数学であるが、クリエイティブの創造と結びつき、数学には実数しかなかったが、虚数を得ることで、豊かな整数の世界ができたといっていました。これと同じように、我々も豊かな虚の世界を持つことでより豊かな全体としての実の世界を持つのではないかと思います。

孤独だけでなく、共同体感覚があった方が良いのです。学生時代に孤独な世界があったが、仕事してから共同体感覚があった方が良いと思う人が多く、悩み出す人がいます。不登校で考えると、フリースクールなどでどのように共同体感覚をもつのか、を考えてほしい。アドラーによると、共同体感覚とは、貢献感、意味のある存在だという有意義感、信頼感、安全感、所属感などを同時に持つことです。いろいろな子どもと関わりながら、共同体感覚を意識しながら、指導していけば良いのかと私も考えていきたい。

フォーラムにおける論点

フォーラムでは、水口先生の基調講演の後、本法人が作成した原案が説明され、これに基づいて以下のような議論が行われました。この議論を経て「現場から考える不登校支援」策が作成されました。

論点 1

「すべての児童・生徒が安心して学習するために、クラス担任、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーなどがチームとして支援する学校経営を」についてこれをどのように構築するのか。

議論 A

スクールカウンセラー（SC）は、経験が大事であり、応用編であるので、いきなりスクールカウンセラーにつくのではなく、病院などで経験してからではないと有効な仕事はできないとの考えが示され、SC も「チーム学校」として機能していない場合もあり、教育委員会など、「チーム学校」のことをわかっている人が指導をした方が良いのではないかとの提案があった。

議論 B

文科省の COCOLO プランに不登校になる前に「チーム学校」で対応することが必要であることが提起されています。チーム学校を機能させることが子どもたちを救うことになるのではないか。

議論 C

「チーム学校」のなかに養護教員が入っていない。養護教員の視点は必要である。SC と養護教員は顔を合わすこともないこともある。包括的に見ていくにも養護教員の視点が必要である。

議論 D

生徒指導の先生と養護教員の先生との連携もないところもある。子どもの指導にとってこの連携も重要である。

論点 2

「不登校児童・生徒や親との信頼関係を形成し支援するための OJT による研修を」について OJT は非常に重要である。頭でわかっても、実際にできない。専門家も現場から学ぶことまさにその通りである。研修を現場につなげることが重要であるが、つなげ方を具体的に考えてほしい。

議論 A

講演の中にあったスーパービジョンが必要である。先生にはそういう意識があまりない。先輩の先生や、だれが話を聞いてくれる人との話の中で、自分でどうすれば良いか気づいていく。このようなスーパービジョンを制度化する必要もあるかもしれない。

議論 B

　さらに、研修も必要であり、そこで先生たちも相談できるかもしれない。いろいろな話や助言を聞くことは大事である。子どもの見方が変わる可能性がある。

議論 C

　研修と助言によって情動調律、自己愛を受け入れるような先生に成長していく事が必要である。

議論 D

　より具体的な研修体系を考えていく必要がある。

論点 3

SSW はひきこもり対策で重要であるが、日立市では量的にも足りないのではないか。特別支援学級が充実しているが、そこに入りきれない子どもがいるが、その子たちと学校をつなぐ役割も SSW の役割であるのではないか。地域のことがわかっている SSW が求められているのではないか。

議論 A

SSW は社会福祉士がなるが、カリキュラムのなかに SSW が位置づけられていない。大学のカリキュラムにおいて SSW を社会福祉の学習に位置づける必要がある。

議論 B

茨城県の SSW と SC の状況に関する資料が今手元にないので詳しくはいえないが、かなり不足していることは確かである。

おわりに

本報告集で紹介したシンポジウム、フォーラムでの報告は本スクールの一年間の試行錯誤をそれぞれの立場から述べられたものです。短い時間に多様な活動があり、悩みがある中で、学校に復帰したもの、高校に通学するようになったもの、周りと関わりが持てるようになったものなど、様々な到達点がありました。もちろん、途中で辞退した者などもおり、私たちの活動はまさに試行錯誤の連続となります。今後とも皆様のご支持をお願いしたいと思っています。

なお、この報告集はすべて代表理事の安田が責任を負って編集していることを付しておきたいと思います。

2024 年 3 月 31 日